



I am Fatty!

【一九一四年】

『ノック・アウト』

【一九一五年】

『デブ嬢の海辺の恋人たち』

【一九一六年】

『デブと海嘯（つなみ）』

『デブ君の焼餅』

『デブの料理番』

【一九一七年】

『おかしい肉屋』

『デブ君の入院』

『ロスコー・アーバックルの化の皮』

『ロスコー・アーバックルの入婿』

『ロスコー・アーバックルの結婚』

『ロスコー・アーバックルの医者』

『キートンとファッツィのコンニー・アイランド』

『ロスコー・アーバックルの勇士』

【一九一八年】

『キートンとファッツィのアウト・ウエスト』

『ロスコー・アーバックルの給仕』

『ロスコー・アーバックルの藏窟王』

『キートンとファッツィのグッドナイト・ナース』

『ロスコー・アーバックルのコック』

【一九一九年】

『キートンとファッツィの初舞台』

『田舎者』

『ロスコー・アーバックルの自動車屋』

【一九二〇年】

『結婚年』

【一九二四年】

『鉄のラバ』

『間抜けだが勇敢』

『探偵学入門』

【一九二五年】

『西部成金』

『セブンス・チャンス』

【一九三三年】

『デブ君の大騒動』

埋もれたデブ君

「ファッティ(デブ君)」と呼ばれ、当時、チャップリンと人気を二分していたコメディアンがいた。

デブ君と呼ばれていた通り、体重は一二〇キログラム。丸く愛らしい顔に、ポンつとお腹の出た体型をしている。

しかし、ただのデブ君ではない。カップに入ったコーヒーをソーサーごと零すことなく飛ばしたり、フライパンから投げたホットケーキを一度足で蹴り上げクルッと廻してフライパンに落とす等々と、その体型からは想像できないほど軽く身をこなし、機敏なアクションと見事な芸当を繰り広げる。

本名、ロスコー・コンダリン・アーバックルは一八八七年三月二十四日、カンサス州スミスセンターで生まれた。翌年、一家はカルフォルニア州サンタ・アナへ移り、小さなホテルを経営するが、父親が家を出て行ってしまう。一八九五年、フランク・ベイコンが主催する巡業一座に加わってステージ・デビューを果たす。

道化師を演じたりと、暫くはステージに出ていたが、四年後に母親が亡くなり、父親も家出をしたため、アーバックルは実家のホテルに戻り、従業員と肉屋の手伝いをしていたという。

この間に彼は中学校へも通うが、勉強と仕事に加え、夜はジャグリングを習っていたために、結局、卒業はできなかった。しかし、この時の体験が、彼の見事な芸当に活かされているのだ。

ろう。

それから、独自の地方巡業を始め、一九〇九年、セリング・ポリスコープという会社で映画デビューを果たす。だがそこでは成功せず、一九一三年、アメリカ映画界を代表する喜劇の帝王と呼ばれるマック・セネットのところ、キーストン社の門を叩くことになる。

「名前はロスコー・アーバックルといいます。ファッティと呼んでください」と、セネットも彼のアボなし訪問に戸惑ったが、その場で演じた軽やかなステップや踊りに、すぐさま契約を決める。そして「警官隊」と言われるコメディアンの一員として参加することになる。

愛らしい童顔と巨体から繰り出される見事な芸の数々に、入社後間もなく彼は人気者となり、国民的スターへとなっていた。一九一六年からは、自ら監督・脚本を行うまでになる。

その後、一九一七年に独立し、コミックフィルム・コーポレーションを設立。彼は、バスター・キートンと実際の従弟であるアル・セント・ジョンを従えて、自由奔放な創作活動を開始する。

それから、パラマウント社代表のアドルフ・ズーকারと契約し、長編映画を作ることになる。この時のギャラは、なんと年俸三〇〇万ドル(当時、一ドル二二〇円とすると、約三億六千万円)。彼の人生は、人気と成功に満ちていた。そして、このまま順調に進んでいくはずだった、あの事件が起こるまでは……。

一九二二年のレイバー・デイ(労働祭)の週末、三〇〇万ドルの契約を交わしたアーバックルは、サンフランシスコのホテルでお祝いのパーティを開くことにした。かねてから女優のヴァージニア・ラップに色目をつかつていた彼は、友人のモード・デルモンドに彼女を連れてくるよう頼んだ。

九月五日の月曜の朝、アーバックルと仲間たちは、ホテルにチェックインし、禁酒法の時代に密造ジンを手配した。ヴァージニアはデブが大嫌いだったが嫌々ながらも行くことにした。

ジャズが大音量で鳴り響き、お酒はたくさんある。アーバックル主催の気楽なパーティともあってか、客もホストも良い気分ですっきりと酔っていた。乗り気でなかったヴァージニアも、お酒を二、三杯ひっかけると気分が変わった。トップレスで踊りだす者や、パジャマを交換したりとパーティも荒れてくる。小用を催したヴァージニアは、バスルームへ行く途中アーバックルに捕まり、無理矢理ベッドルームへと引きずり込まれてしまう。アーバックルは客にウイंकをしながら「このチャンスをずっと待っていたんだよ」と言いつてドアを閉じた。

モード・デルモンドが後に証言した。

突然、ドアの向こうから鋭い叫び声があがった。驚いた客はドアに群がり声をかけるが応答がない。くすくすと笑いながら出てきたアーバックルは、ズタズタのパジャマにヴァージニアの潰れた帽子をおかしな角度で被った格好で言った。「さ、あの娘に服を着せて連れて帰ってくれ。声がでかすぎてかなわない」

ヴァージニアはベッドに寝て呻いていた。「息ができない」。すでに裸だったが、必死になって服をむしり取ろうとしていた。「死ぬわ、死



アル・セント・ジョン



『おかしな肉屋』より



映画の中でもファッティはモテモテ

ぬわ……あいつがやったのよ……」

集まった皆は、ヴァージニアの局部に角水を置いてみたり、水風呂に漬けてみたりとすぐに家伝の治療を試す。

騒ぎに嫌気が差したアーバックルはヴァージニアを引きずって言った。「はつきり言って窓から放り出してもいいこうにかまわねーぞ」

パーティも終わり、ヴァージニアはようやく病院に運ばれた。「フアッティ・アーバックルがやったのよ……あいつを捕まえて！」ヴァージニアは、看護婦にこれだけ言うと言った状態に陥っていた。そして、九月九日、ヴァージニア・ラップは二五歳という若さでこの世を去った。

モードの証言は、彼にひどい打撃を与えた。

検事の告訴自体、予審で彼女の証言によるものだった。しかし、モードが証言台に立つことはなかった。どうやら彼女は、パーティに可愛い女たちを世話するといったあやしげな商売をしていたらしいのだ。

証言が嘘だからといって、騒ぎが治まるわけではない。国民的スターのスキヤンダルに、新聞もあることないこと書き立てた。

泥酔して不能状態になっていたアーバックルが、腹立ちまぎれにコーラの瓶で彼女を責めたという噂。はたまた、アーバックルが人並みはずれた巨根の持ち主なのは有名だとか……。

二六六ポンドでボディ・プレスをきめられたら、ヴァージニアもひとたまりもないのでは、とか。

いったい全体、どうしてヴァージニアの膀胱は破裂したのか。第一に、ヴァージニアが最初に発作を起こしてから病院に運ばれるまでに遅れがあった。何人かの医者が診察し、手術が必要なくらい具合が悪いのに、入院したのは、九月八日のことだった。そして不思議なことに、

運ばれたのは産婦人科の病院だったのだ。

死因は危うく解らずじまいになるところだった。彼女の死後直ちに、検死医に知らせずに医師たちは検死解剖してしまったのだ。それを嗅ぎつけた検視官のマイケル・ブラウンが見たものは、懸命なもみ消し工作だった。ガラス容器を持った雑役夫が焼却炉に向かっていった。容器の中には、傷ついたヴァージニアの局部が入っていた。ブラウンはそれを没収し、独自に検査を開始した。その結果、ヴァージニアの膀胱は何らかの暴力行為によって破壊され、腹膜炎を併発したのが死因であることが判明した。

裁判は二転三転した。アーバックルは終始、一切の罪状を否認するという姿勢で臨んだ。

事実、アーバックルは何もしていないのだ。ヴァージニアは健全快活な女性ではなかった。一九〇八年から一九一〇年までに、彼女は五回も中絶手術をしている。これだけやれば、お通じも悪くなるだろう。そのうえ、彼女は慢性膀胱炎と診断されていた。発作の時には鋭い痛みを襲われ、服を引き裂いて暴れる。それに加え、彼女は淋病にもかかっていた。

アーバックルは、着替えのために寝室に入っただ。すると、風呂場で吐いているヴァージニアを見つける。アーバックルは彼女をベッドに寝かせ、楽にしてやると友人に助けを求めた。

彼が、友人に戻ってくると、ヴァージニアはベッドでのたうち服を引き裂いて叫んでいた。膀胱炎だ。この騒ぎに他の客も集まり、家伝の治療を試した。しかし、アーバックルは何もしない。ヴァージニアの膀胱はこの時すでに弱っていて、この手荒な扱いによって破裂してしまったのかもしれない。

さらにあの産婦人科。何故、ヴァージニア

はそこに運ばれたのか。違法の中絶手術が原因で死んでしまったものでは？ それなら隠蔽工作にも説明がつく。そして、アーバックルが彼女を犯したのかどうか。彼は何もしていない。ヴァージニアは淋病を発症していたが、留置場で過ごした期間中、彼には何の兆候も症状もまったく見られなかった。

物証がなく、承認もいまい加減であったため、裁判は、アーバックルの無罪に終わった。しかし、この判決は、彼を救ってはくれなかった。無罪は確定したものの、裏切られた国民たちはデブ君作品を全米で上映禁止運動を起こし、女性を陵辱したという理由から、婦人運動家、教育関係者、宗教関係者が中心となって彼の映画を全て回収、焼き討ちをした。そのうえ、彼を迎え入れてくれる映画会社はなかった。唯一の救いは、親友のバスター・キートンだけだった。

暫くは映画界から姿を消すが、キートンの誘いもあり、自分の人生はフィルムにあるということで、匿名監督として再デビューをする。この時の名は、キートンが「すぐに良くなるだろう」と言うシャレで *Will be good* とアーバックルの父、ウィリアム・グッドリッチを合わせて、ウィル・B・グッドリッチとつける。

事件から十一年目の一九三二年、遂にアーバックルはデブ君として映画に戻ってくる。そして、トーキーで復活を果たす。このトーキー作品から、世間一般の憎しみの感情も時間と共に薄らいだらしく、奇跡のカムバックとして再び注目を集めた。だが、一九三三年六月二十九日、宿泊先のホテルで、心臓発作を起こし、帰らぬ人となる。

その後、一九八五年七月三日、サンフランシスコ最高裁判所は、完全無罪を発表する。



オチャメ★なだけじゃないアーバックル



ヴァージニア・ラップ



バスター・キートン

ロスコー・ファッティ・アーバックル

新野 敏也

Q、アーバックルは、小さい頃から太っていたんですか？

太っていたみたいです。最終的に一四〇キログラムという太つてると思いますが、身長が結構高いようなので、今で言ったらプロレスラーぐらいの体型ですね。思ったより太っているってわけでもないと思うんですけど。

キートンの身長が一七〇センチメートルない（正確には一六八センチメートル）のに対して、アーバックルは一八〇センチメートル以上あるはずなので、劇中だと大きく見えますね。可愛らしく見せたり小さく見せるために猫背にしていたので、余計に太って見えるのかもしれませんが、それと、デブ君って名前で売っていたので、あんまりたくましく見せないようにしてたんじゃないかという気はしますね。結局はコメディアンなんで。あれが例えばシユワちゃんみたいなアクションスターで売ってたら、見た目変えてたと思うんですけどね（笑）。

Q、アーバックルが出ることによって、どのように喜劇の作風が変わったんですか？

よく表情がわかるようなクローズアップとか、あまり映画の手法としてその当時使われてなかったものをだんだんと取り入れるようになった

りましたね。

前段階の歴史で言いますと、その当時の映画はまだ新しい発明でした。クローズアップや顔の表情が分かるようなアップはあまり撮っていませんでした。それは、劇場でいきなりデカイ顔が出ると観客が驚くだろうという発想が映画会社の方にあったのと、演劇の延長という考えで、映画のスクリーンはステージそのままのサイズという発想があったんです。

Q、アーバックルが喜劇にもたらした影響は、事件や作風以外では何かありますか？

やはりスター性ですね。

乱暴に言うけど、コメディってバカなこと、そういうことをやっている人がそんなすごい収入を得るとは思わないんですよ。アメリカが第一次世界大戦（一九一四〜一九一八）後、世界の中心の経済力を持ったときにアーバックルがスターになったことで、流れが変わったんだと思いますね。コメディアンが一番収入が多くなり、観客動員が一番多く出るということをもたらしただけじゃないかと。今も、例えば長者番付でダウンタウンの二人はトップに入っています。あれと感覚的に一緒です。本来だったら、歌舞伎役者とか劇団四季の主役の人がトップにいないくちやなに、何でお笑いのバラエティに出てくる人がトップにいるんだろうというの

も、やっぱりスター性があるからですね。

同じ時代のコメディアンは世界中に何千人もいたはずなのに、チャップリンを別格にしても、若い世代の人で知っていると、検索したら出てきたとか、作品を見た人がいたりというのは、やはり本人にスター性があるんだろうなという気がしますね。

Q、アーバックルの魅力は？

アーバックルの魅力は、第一印象で人を惹きつける、知らない人が見ても惹きつける魅力があるんじゃないかと思いますね。全く知らない人が見ても華があるように見えたり、小さい子が見ても、一目見てすごく好きになると……。人を惹きつける部分が相当あるんだと思うんですよ。顔とか雰囲気でも。だから、淀川長治さん（映画評論家・一九〇九〜一九九八）が小さい頃一番好きだったというのがありますね。

演技でも、こちらの定期上映会でアーバックル特集を夏休み中にある学校の中で上映したんですよ。当然、アーバックルを知らない学生が見に来るんですが、彼が出てくるとやたらウケるんです。ここ最近のうちの上映会って、お客さんの八割くらいが二十歳前後の女の子なんです。アーバックルが出ると、別にギャグやっとなんでも女の子はウワーって感じでウケてるんですよ。だから、多分アイドルっぽく見れる雰囲気って持っているんじゃないかと。笑っていいともでも、香取くんとか出るだけで客席からワーってなるのと感覚的には一緒になるんだと思いますね。

それと、作り方がその当時にもせずごく斬新で、後に有名な人がやって自分が発明した



監督をしているアーバックル

新野 敏也

1965年東京都出身。映像制作会社に勤務する傍ら、アマチュア・サークル「喜劇映画研究会」2代目会長として世界初・最大のデータを編纂した『サイレント・コメディ全史』を自費出版。以降、放送・出版・映画関係者から絶大な指示を得て専門学校・大学・各種公共機関などで特別講師や企画協力、調査協力を行っている。



撮影方法だとか演出方法だと言われているものも、二十年や三十年前にアーバックルがギャグの中でやっているんですね。それを改めてちゃんと調べるようになってからは、これはスゴイわと思いました。それと、パントマイムとかその辺の技量がケタ違いにすごいってのを改めて見て感動しましたね。

Q、アーバックルが現役で出ていた時の作品と、ウィリアム・グッドリッチになってからの作品の違いは何ですか？

ギャグは同じノリですよ。グッドリッチになつてからの作品を全部見ているわけではないんですが、明らかに発想は一緒のものがあるんですよ。ただ、アーバックルと同じ技量を持っている人じゃない限り、細かいことは出来ないんですよ。だから、彼と同じ技量を持つ徒弟のアル・セント・ジョンやキートンたちとかは、監督であるアーバックルの考えているギャグと出来るんですよ。パイ投げや物投げてぶついたりとかを一メートルくらいの距離でバーンとできるのは分かるんですけど、建物挟んで反対側を歩いている人間に当てるのかは、相当熟練が必要なんです。そういうのをアーバックル以外の人がやると、たいてい出ているのはアル・セント・ジョンやキートンとかになっちゃいますね。作風としては同じですが、それ以外の今となつては無名のコメディアンが出ているグッドリッチ作品は、古典が面白いかつまらないかで言う、大変つまらない部類になりますね。本人がすごく親しいキートンとかがやっていない限り、全然ノリが変わっちゃうんだろーなという気がしましたね。

大食俳優

アメリカの活動写真専門の喜劇俳優にアルバックルといふ名高い男がある。恐ろしく肥つた、体重四十貫の上のあらうといふ大男で、こんな図体で、罪ない物真似をするのが可笑い、いつて観客に大持てである。

この男が最近に紐育へ往つた時、ふとした出来心で市の衛生講演会へ傍聴に出掛けて往つた。講演会の傍聴者といふものは、どこでも大抵出来心から来るものなので、若しかさうではない傍聴者が少しでも居るとしたら、それはみな頭の悪い連中で、聴者としては頼もしくない輩である。

その衛生講習会の壇上に現れたのは、近頃売出しの若い衛生学者で、蛋白質と澱粉と含水炭素と等分に混ぜて模範的に試験管のなかで拵へたやうな身体をしてゐた。それにしては少し脂肪が足りないやふに思はれたが、時筋柄肉の価が高くなつてゐるので、無理もないと喜劇役者は思つた。

衛生学者は自分の口から出る一語一語が、生みたての卵のやうに滋養に富んでいるらしい口附きをして喋舌つた。その説によると、仮に人間を七十五歳迄生き延びるものとして、一生の間に食べる食糧は、自分の体重の千五百倍になる。その中から麵だけを取つて、別に積重ねるとしたら、立派なお寺の建物程の容積になる。一生の間に齧つた野菜を、一纏めに汽車に積み込むとしたら、貨車を三哩ばかり繋かねばならぬ事になる。煙肉を一片づつ列べたら、ざつと四哩の長さになる。魚類が千五百貫、鶏卵が先づ一万二千個といふころ……

聴衆はそれを聞くと、てんで恥しさに掌面ですつと腹を撫でおろして居た。鉄面皮な胃の腑はそんな間でも平気で呼吸をしてゐた。衛生学者は一段と声を高めて、

「それから砂糖が千二百貫、塩が百八十貫、巻煙草が二十五万本……」

こゝまで喋舌つて来ると、喜劇役者は唐突にぼろぼろ涙を流して泣き出した。

「どうした、気分でも悪いのか。」

連の男が心配さうに訊くと、喜劇役者は手で押へつけるやうな真似をして、

「いや心配せんでもい。」と慌てて涙と一緒に涙を拭いた。「どうも大した食物だね。そんな食物を割引もして貰はないで、食つてしまつたと思ふと、つい悲しくなつて。」

大阪毎日新聞

大正六年（一九一七）七月二十二日（夕刊）

さて、真偽の程は？ 新野さんに訊いてみた——
創作か、アメリカンジョークの日本語訳ではないかな。

書かれている年代で言うとアーバックルが日本でも人気がある頃なので、主人公にアーバックルを持つてきた方がおりがいいからつていうのもあるかもしれないですね。別の太った人がいて、こういう話があったのかもしれない。レストランに入つてソーセージだけをずっと食べている映画があるので、それを元にこのコラムを書いたつていうのもあるかもしれないですね。

参考文献

『ハリウッド・バビロン』
『ハリウッド・バビロン1』
『完本茶話』
『地獄のハリウッド』
『サイレント・コメディ全史』
『ハリウッド幻影工場』

写真提供・取材協力

喜劇映画研究会

<http://kigeki-eikenn.com/>



映画のスタッフと一緒に…



TCG 06:54:48:11
©喜劇映画研究会



©喜劇映画研究会



©喜劇映画研究会



TCG 06:54:51:13
©喜劇映画研究会



TCG 06:54:46:13 ©喜劇映画研究会



©喜劇映画研究会



TCG 06:54:53:04
©喜劇映画研究会



©喜劇映画研究会



©喜劇映画研究会



TCG 06:54:57:00
©喜劇映画研究会

TCG 06:54:4



06:43:06:16



©喜劇映画研究会



©喜劇映画研究会

©喜劇映画研究会



©喜劇映画研究会

THE
END

デブを売り込んでいる芸人のキャラクターといえは「汗っかき、動作が遅い、すぐに疲れて息を切らす」など、失礼だが良い印象は持っていない。石塚英彦のような見ていると和むデブや、振り付け師でもありダンサーのパパイヤ鈴木のようにちよつとしたダンスならササつと格好良く決めてしまうデブもいる。しかし、九割以上は冒頭のイメージが当てはまる。アーパツクルは、私のそんなデブへのマイナスのイメージを一気に消し去ってくれた。デブ専ではないが、映画で彼とキスをする女優が羨ましいくらいに思ってしまったほどだ。その体格からは想像もできない素早い動き、神業とも言えるジャグリング、そしてスクリーンいっぱい映る笑顔。当時の人々は魅了され、そして彼が大好きだった。

そんな大スターの「Fatdy」（デブ君）を一晚で嫌われ者にした事件。その頃のハリウッドは風紀を乱す悪の巣窟として、市民に糾弾されていた。マスコミは待ち構えていたようにアーパツクルをハリウッドの悪の象徴の様書いた。真実か否かではなく、新聞を売るために各紙はこぞって信ぴょう性のない証言やねつ造した写真を載せた。アーパツクルの事件を一面に載せれば売り上げが倍になった、という話もある。

今、誰もが喜劇王といえは、チャップリンを思い浮かべるだろう。しかし、スキヤンダルだけが先走ることなく彼の魅力や存在が伝わっていたら、アーパツクルが喜劇王と呼ばれていたかもしれない。メディアの犠牲となって埋もれてしまった銀幕の麗人は、創作する意欲を捨てず、友人やファンに支えられ多くの作品を作った。